

聖書 ルカの福音書1章5～23節、57～66節

説教 その名をヨハネと名づけなさい

はじめに

さきほどろうそくに火が灯され、今日から主の御降誕を待ち望む待降節、(アドベント)が始まってまいります。さてそのアドベントですが、主を待ち望む期間だと言われても、教会に初めて来られた方にはその意味がよくわからないと思います。もちろん単なる習慣ではありません。聖書に基づいた意味があつてしています。そこで今日は、アドベントとはなにか、そのアドベントにどうしてヨハネの誕生の話が出てくるのか。それが今の私たちにどのようなつながりがあるのか考えてまいります。

先ほどお読みした聖書の箇所、すでに「ノアのじかん」で説明していただいたので、細かな事は省きます。

1 ザカリヤの願い

1) 子どもがない

13節。「御使いは彼に言った。『恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。その名をヨハネとつけなさい。』」

一昔前日本では、嫁に子どもが生まれなければ離縁されても文句が言えないとされてきました。聖書の世界もよく似ていて、子どもが生まれないことを恥とする文化がありました。祭司という非常に名誉ある職業にあったザカリヤとその妻エリサベツはそのことでずっと苦しんでいました。もちろん、二人はずっと子どもが授かりますようにと祈ってきた、けれどもなぜか子供は与えられず年を重ねていった。そこへ御使いが突然現れて「ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです」と言われる。「あなたの願い」とは何か。子どものことだということはもう明らかです。

2) 救い主を待ち望む

では願いはそれだけだったのか。よくみると実はもう一つある。ヒントは6節。「二人とも神の前に正しい人で、主のすべての命令と掟を落度なく行っていた。」これを読んで、皆さんはこんなふう思ったのではないのでしょうか。「この二人は聖書に書かれていることをきちんと守っていた立派な信仰者だった。」でもそれだけなのか。正しい人

とはなにかです。律法をきちんと守っていたから正しい人と言われたのか。もしそうであれば、あのパリサイ人、律法学者の生き方と何も変わりません。それはイエスがもっとも嫌った人たちです。

そうしますと、「神の前に正しい人であった」とはどういうことかとなる。罪を犯さない人でしょうか。でもそんなひとはだれもいない。私たちは全員例外なく罪人です。ザカリヤもエリサベツも罪人です。では、どうして「神の前に正しい人であった」と言われるのか。罪人である私たちが主の前に正しいと言われるのは、ただ一つしかない。「私は罪人です」と告白した時です。この告白をもって神は、「あなたは神の前に正しい人である」と言ってくださる。そしてどうなるのか。私は罪人ですと喜びながら言える人はだれもいません。罪の深さがわかればわかるほど、こんなみじめな自分を助けてほしいと願います。人は人を助けることはできません。神だけが私たちを助けることができる。それでザカリヤも願った。神よ、このような罪人を救う救い主を送ってください。

2 御使いは

1) ヨハネと名づけなさい

御使いは、「あなたの願いが聞き入れられたのです」と語りました。それは願っていた子どもが与えられますよということと同時に、あなたが願っていた救い主がもうすぐ与えられていく。そのことも語っていました。昔お菓子のコマーシャルに「一粒で二度おいしい」というのがありました。ザカリヤは子どもが与えられる、と同時にその救い主が与えられる、その二つの願いが同時にかなえられていくことを告げられたのでした。

これから生まれる子どもが救い主になるという意味ではありません。イエス誕生の話は、簡単に言えば二段階になっている。ヨハネがまず先に誕生し、その後でイエスが誕生する。この二つは別々ではなくセットになっている。どうしてイエス誕生の話の前に、ヨハネの話が出て来るのか。いったいヨハネは何者なのでしょう。

2) 主に立ち返らせる

そのことは御使いのことばからうかがい知ることができます。15～17節。「その子は主の御前に大いなる者となるからです。彼はぶどう酒や強い酒

を決して飲まず、まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ、イスラエルの子らの多くを、彼らの神である主に立ち返らせませす。彼はエリヤの霊と力で、主に先立って歩みます。父たちの心を子どもたちに向けさせ、不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせて、主のために、整えられた民を用意します。」

いろいろありますが、きょうは二つのことに目を留めます。一つ目。「主に立ち返らせる。」「不従順な者たちを義人の思いに立ち返らせる。」確かにヨハネは荒野でこう叫んでいます。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」(マタイ2章3節) この声を聞いて、心を刺された人々はヨハネの所に来て、罪を告白しヨルダン川でバプテスマを受けていく。御使いが語ったとおりです。

3) 主に先立って歩む

ヨハネがしたことの一つ目。御使いはこう語っています。「主に先立って歩みます。」ヨハネの役割は何かと問われれば、まさにこのひとことに象徴されています。主イエスが来られる前に主に先立って歩む役割。それがヨハネだった。たまたま生まれる順番で、そんなふうになったのではありません。旧約聖書の時代、イザヤはこう語っていました。イザヤ書40章3節。「荒野で叫ぶ者の声がする。主の道を用意せよ。荒れ地で私たちの神のために、大路をまっすぐにせよ。」イザヤが活躍したのは紀元前およそ700年頃ですから、列王記第二に描かれている時代です。そこで見てきたように、北イスラエルも南ユダもほとんどの王が罪に墮落して、国内は混乱しじょじょに国力を失い、外国に攻め落とされていく。そこに住んでいた人々はこう思っていたのではないのでしょうか。「政治家は自分のことだけ考え、人々の心がささくれ立ち、どんどん時代が悪くなってく。いったい将来はどうなっていくのだろう。」まるで闇が深まるような時代だったのではないか。そんなときにイザヤが現れて、救い主がやがて来られるという希望のことば、光となることばを語った。でも次に考えた。「私は救い主だ」と勝手に言い出す人たちが現れるだろう。どうやったら本当の救い主だとわかるんか。そのこともイザヤは語った。救い主がこられる前に主の道を用意する者が現れる。それであるあなたがたはだれが本当の救い主であるかがわかる。

ザカリヤとエリサベツは、イザヤ書を読んでいます。それを読みながら、罪人である自分たちを救ってくれる救い主をずっと待ち望んでいました。

その願いがいま聞き入れられたと御使いは教えます。それだけでも驚くべきことですが、御使いはまったく予期していなかったことも告げた。「エリサベツが産む男の子こそ、まさにあのイザヤが語った主に先立つ者となる。」

3 主を待ち望む信仰

1) あなたが信じなかったので

これを聞いたザカリヤはどうしたか。「私はそのようなことを、何によって知ることができるのでしょうか。」ようは「そんなこと信じられない。」そう言った。どう思いますか。長年与えられなかった子どもが与えられる。聖書にもそのような例があるから、そうかもしれない。そこまで素直に信じられても、その産まれてくる子どもが、あの聖書に預言された働きをしていく。突然そんなことを言われたら、だれだって「まさか」と思うでしょう。ザカリヤの気持ちはよくわかる。

2) ただちに口が開かれ

ところがこの御使いはどうしたか。ザカリヤが信じなかったというので、口をきけなくしてしまっただけ。昨年、帯状疱疹から右顔面麻痺を患った時、左半分は動くので、まったく口がきけなくなったわけではありませんでした。それでもいきなり口が動かせなくなるのはショックでした。ザカリヤの気持ちが少しわかりました。私の場合は何かの罰であなつたとは思っていませんが、ザカリヤの場合は、信じなかった罰だったかのように書いてある。口がきけるようになったのは、それから十ヶ月、エリサベツが男の子を産んで、どんな名前をつけようかと皆が相談しに来た時。小さな板の上に「その子の名はヨハネ」と書いたら、たちまち物が言えるようになった。

これは、神さまのなさることに私たちは何事も疑わず信じて従いましょう、という教訓でしょうか。そんなことはないはずですが。あのマリアだって「あなたは男の子を産みます」と告げられた時、「どうぞ、あなたのおことばどおりに、この身になりますように」と答えてはいますが、心は混乱していたと思います。今日は読みませんでしたが、親戚のエリサベツをわざわざ訪ねていったのも、心細かったからでしょう。信じるというのは口で言うのは簡単ですが、大変なことなのです。

3) 沈黙の期間

それなのになぜザカリヤは物が言えなくなったのか。皆さんも経験がないのでしょうか。思いがけ

ないうれしいことがあったとき、すぐにだれかに伝えたくなくて、ああでこうでと大はしゃぎする。でも後から考えたら、自分がいただいた恵みはもっともっと大きかったと気がついていく。自分はなんでも分かっているそう思っていたけれど、ほんとうは何分の1もわかっていなかった。沈黙して初めて気がつくことがあるのではないのでしょうか。神の恵みを本当に受けとめるために、人は沈黙しなければならないときがあるのではないか。ザカリヤがものが言えなくなっていくのは罰ではない。恵みを知るためであったのではないか。

このアドベントの時、世の中はますます大騒ぎをしていくでしょう。でも、私たちは神の前に静まりながら、救われた恵みを味わっていきたいと願います。

二千年前、子どもに恵まれず悲しみをかかえていた一組の夫婦。この二人は、主が必ずこの悲しみを喜びに変えてくださると信じ、救い主を待ち望んで来ました。おなじようにイスラエルの民たちは主がアブラハムと交わされた契約からおよそ二千年にわたって救い主を待ち望んで来たのです。私たちはその故事にならって、どんどん日が短くなって光が薄れていくこの季節に、光となって来てくださる主を待ち望む心に立ち戻りたいと思います。